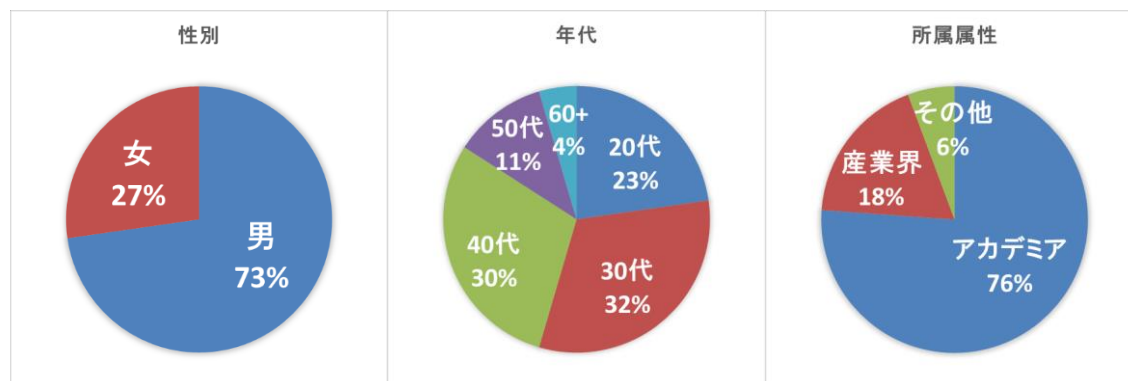


第4回食欲・食嗜好の分子・神経基盤研究会 事後解析結果

アンケート集計・解析結果について：有効回答数 70（回答率：70/88 = 80%）

（コメントは、適宜編集して、まとめさせていただきました）

① 参加者の属性について（参加総数 88 名）



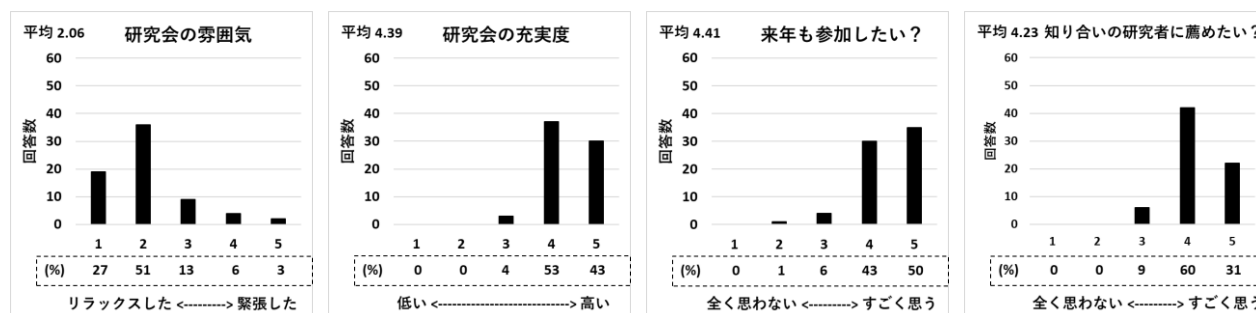
参加者の性別と所属属性の比率は例年と変わらなかった。なお今回は、学生と研究員（合計 27 名）よりも教官（合計 45 名）の参加者の方が多く、20 代よりも 30 代・40 代の参加者が多かった。

コメントの抜粋

- 演題はもう少し数があってもよい。若手の発表が少ない。

解釈と対策： 本会は、参加もオープンで、演題も公募していることもあり、参加者と演題数を調整することが難しい。主催者の努力だけでは限界があるため、「知り合いの研究者に薦めたい」と感じている皆様にも、ご協力をお願いしたいと思います。

② 雰囲気・充実度など



解釈： 全体としては、リラックスした雰囲気、充実度の高い研究会として定着したと言えます。

初参加の方々のコメント

- 専門領域的には完全アウェイですが、面白かったです。多分、ヒトにすぐに生かそうと思われている方が多いわけではないのかもしれませんが、あまり距離が遠い感じはしなかったです。
- ブレイクを長めにとって意見交換を促すという試みは面白いと思った。

- 楽しい雰囲気でもあり、レベルの高い研究会でした。ポスター発表をさせていただきましたが、肯定的なコメントをいただき、大変感謝しております。今後、リハビリ関係者も誘って参加できれば、臨床へのヒントが沢山あるのではないかと感じました。
- とても有意義で、来年以降もぜひ参加させていただきたい。

解釈： 初参加の方々にも、学際領域化をめざす本研究会の面白さと意義が伝わったようです。

扱われているテーマに関するコメントの抜粋・まとめ

- 食に特化した研究会は他になく、食欲の専門分野の先生方が一堂に会す機会は少ないので、とても貴重な時間でした。この研究会のユニークさを保ったまま、ますます発展することを期待しています。
- 回を重ねるごとに発表内容のフィールドが広がり、レベルも高くなり、研究会の充実度が上がってきていて、とても勉強になっています。
- 基礎検討から社会的観点まで幅広い演題が扱われおり、普段聴講できないとても幅広い分野の発表を聞くことができ、いい勉強になりました。
- リラックスしたなかにも緊張感のある会で、毎回勉強になります。発表を聞きながら、自らのテーマとの関係、発展させられる方向などを考えています。
- 神経伝達や物質レベルの基礎研究においては、まだまだ食欲・食嗜好は未開の分野であることが過去何回か参加させていただき、よく分かりました。
- 今回は社会心理学をされている先生の発表もありました。摂食量については自己記録方法だと「過小記載」されることが多いなど、肥満研究などでよく言われることゆえ、情報の収集もディスカッションできると良かったなと思いました。臨床面からの観察もこの分野の発展のために、お役のたてるかとも思えるようになりました。
- 疫学系、心理、脳計測系などヒト系の研究と、マウス等を利用したコントロールされた研究を、共通のロジックで説明できる方法論を、研究会での活動を通して提唱できると良いと思った。
- 学際領域を作るには、お互いのディシプリンのキー技術を教えあうセッションも必要かと思った。
- ヒト系の研究とのトランスレーショナルな研究を推進するセッションがあっても良いと思う。
- 複数の先生とお話する中で、味覚の受容メカニズムは既に解明されていると思っている方が多かったように思います。実際はそんなことはなく、まだまだ分かっていないことが多いので、もう少し味覚受容メカニズムに踏み込むような研究内容が増えると良いなと思いました。

解釈と対策： 食行動に特化した学際的な研究会を開催することで、いくつもの既存の学会に参加しなくても、幅広く高いレベルで情報収集ができる機会になっている。研究会の方向性である学際化（バラエティーの確保）はある程度達成できているが、不足領域の人材発掘が必要であり、良い方をご存知でしたらご紹介ください。

また、研究領域の求心力を高めるためには、「学際性を統合する共通概念」を構築・提唱する必要性があると認識しました。求心力が高まり、人がもっと集まると、新しいセッションをおこなう余力が生まれ、領域がより一層発展すると思います。

会の特徴（交流の促進）に関するコメントの抜粋・まとめ

- 普段あまり聞けないような話や研究成果を聞くことができ、さらに有識者の方々から助言などをいただけて非常に嬉しく、自身の成長につながると感じました。
- 他の研究会と比較し、非常に交流ができる研究会だと思います。事前に専門分野について資料を頂いていたので、とても話しやすかったです。
- ブレークタイムも多く設けられており、また懇親会もあり意見交換及びあいさつが十分できた。
- 普段はなかなか話せない企業の研究者の方ともお話できる機会があつて良かったです。
- 患者の摂食について日々考える医療従事者でも参加できるこの会はありがたいです。
- お土産の持ち寄りについても、交流のきっかけとなり非常に良い取り組みだと感じました。
- プロフィールのファイルを前もって配布しておくのはとても良いと思いますが、発表者以外にはあまり活かされていないので、発表者以外の自己紹介のような時間を1人30秒で作るなどすると、より交流のチャンスが広がるのではと思います。

解釈： 交流促進は、おおむねワークしているとみられます。プロフィールファイルを参考にして、他の参加者にアポを取り、コラボの可能性を探るなどされている方もいらっしゃいました。発表者以外（今回約60名）の自己紹介を導入するのは時間的に厳しいので、参加者の自助努力を期待します。

③ 開催時期・発表形式、スケジュール（全般）

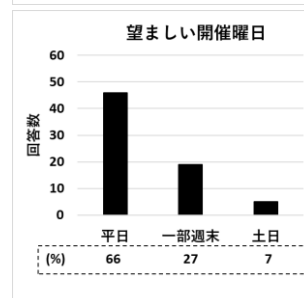
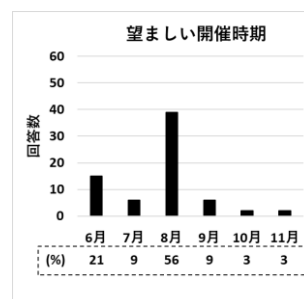
（注釈：今回、開催時期、曜日、発表形式を変更した）

【開催の時期と曜日について】

解釈： アンケート結果は、今回の参加できた方から収集したデータであり、参加できなかった方（過去の参加者で約10名から、学内業務とスケジュールの調整が出来ず不参加の連絡あり）の意見が反映されていないというバイアスがありますが、8月の平日が望ましいと考えている参加者が多かった。

コメントの抜粋・まとめ

- 学会などが少ない8月の開催が好ましいと思います。
- 食品系でこれまで参加の実績があるものが、選択肢のうちでは6月、8月、9月に比較的集中しており、7月だと重なる可能性が低いかな、と思った。
- 曜日は平日でも土・日にかかってもどちらでもよいと思います。臨床の方（土・日が参加しやすいと思います）や企業の方（平日が参加しやすいと思います）のことを考えると、一部週末開催かな、と思いました。

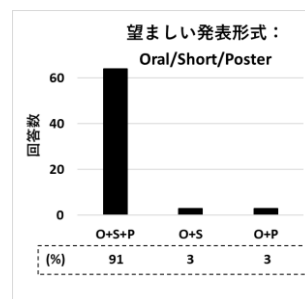


対策： 来年も8月下旬の平日を軸に、開催時期を検討したい。

ただし、平日開催と学生参加を両立するうえで、学期の始まる時期が大学により異なる点も留意したい（学業が忙しい時期は、教員・学生のどちらも参加できなくなるため）。

【発表形式について】

解釈： 今回、Short talk を導入し、ポスターBlitz をなくしましたが、この方向性で良いと考えられます。



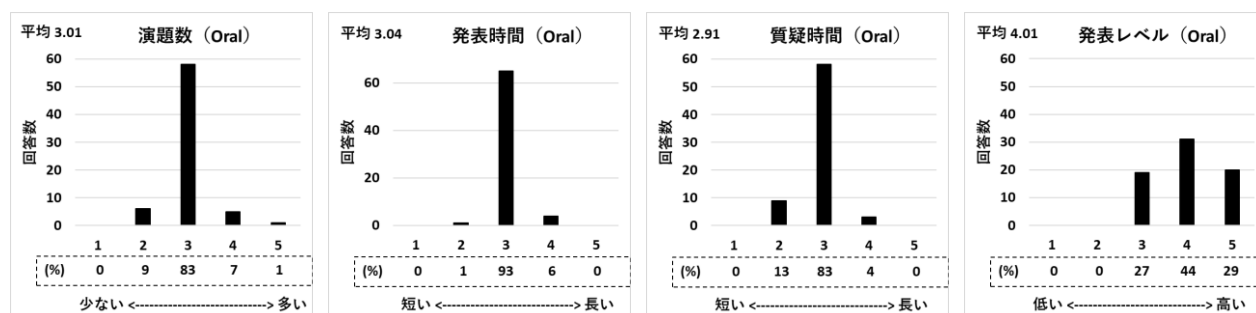
コメントの抜粋・まとめ

- 学会とは少し異なる形式ですが、学際的領域の研究においては、この研究会のやり方は理想に近いと感じました。
- 全体的なバランスなどは、だいぶ完成に近づいている。特にオーラルに関してはこれで良い。
- 質疑が活発であり、そこから更に多くの情報を得ることが出来ました。
- もう少し質疑の時間を確保したい（例えば、発表 15 分、質疑 15 分）。
- 質疑応答が伸びて時間がおしてしまい、休憩時間のディスカッションが短くなったのが残念でした。
- ディベート形式のセッションがあると良いかも。

解釈と対策： 研究会が回を重ねるにつれ、ディスカッションがより盛り上がるようになったため、各発表に要する時間が増えました。来年は、スケジュールに余裕を持たせるためにも、会期延長を検討します（例えば、現行の半日 x 2 から、半日 + 2 日目に午後のセッションを追加など）。

ディベートについては、進行役と時間の確保という運営上の課題を考慮して、導入の是非を検討します。

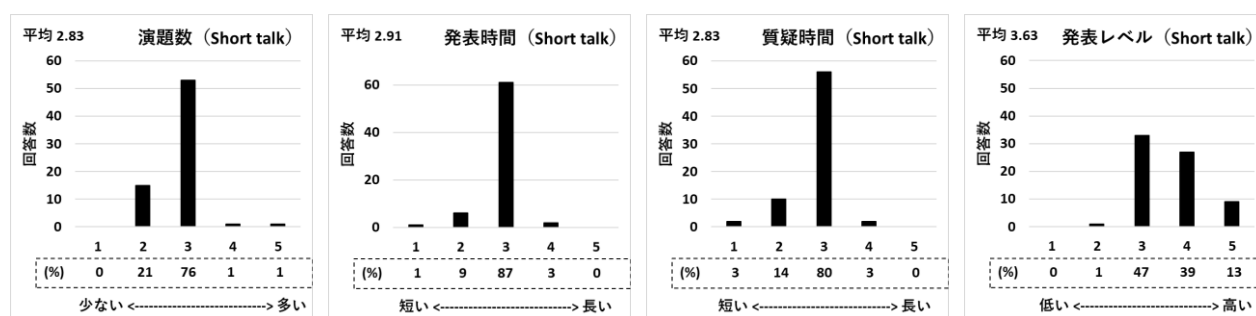
④ 口頭(Oral)発表について



解釈と対策： 前回課題となった口頭発表の質の担保が改善されました。しかし、発表レベルにはまだばらつきがあるため、Oral 発表の質をさらに上げていきたいと思います。

また、発表時間への満足度は高いですが、質疑時間が短いというコメントもあるため、発表 20 分 + 質疑 10 分から、発表 20 分 + 質疑 15 分に変更して、質疑時間をあらかじめ確保したいと思います。そして、質問が少ない場合は、座長が早めに切り上げる方向で対応したいと思います。

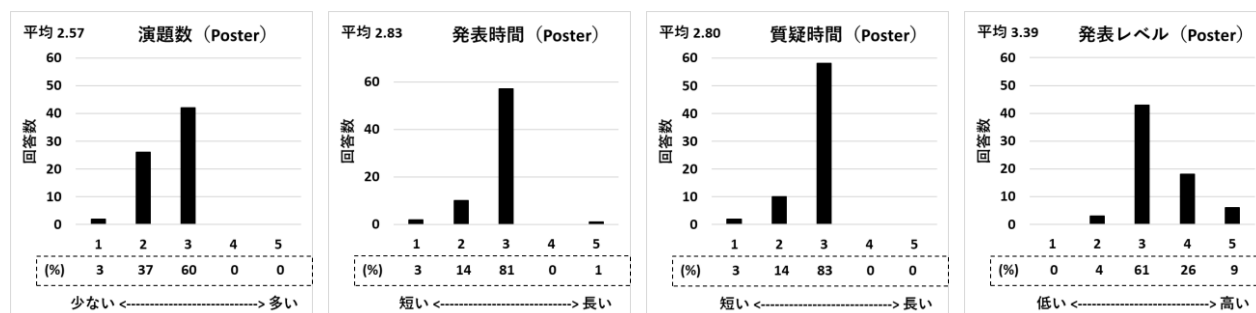
⑤ 口頭(Short talk)発表について



解釈と対策： 新たに導入した Short talk への反応は良いと感じました。

ただし、Oral 同様に質疑時間を短く感じている方もいるので、発表時間 10 分+質疑 5 分から、発表 10 分+質疑 10 分に変更して、Oral 同様に質疑時間をあらかじめ確保したいと思います。

⑥ ポスター発表について



コメントの抜粋・まとめ

- 会場が狭い。時間が短い。
- 発表者が他のポスター発表を聞けないので、例えば 2 部制にしてほしい。

解釈と対策： 今年は Poster Blitz をなくしましたが、セッションの時間はほぼ同じにしました。発表の概要を把握する機会がなくなった分、発表時間・質疑ともに時間が足りていないという意見が、Oral と Short talk よりも多くなりました。また、一度にポスターに人が押し寄せるようになり、会場が狭いと感じられたようです。

Break 中の話題は直前の講演内容に集中しがちですが、一部の Poster 発表者は Break 中にも他の参加者に Poster 内容を説明して、自主的に発表・質疑時間を増やす努力をされていました。

主催者としては、学生やポスドクにとって「Poster 発表は、企業やアカデミアの方々から自分を売り込む良いチャンス」だと考えていますが、若い方のポスター発表が少ないのも課題と捉えています。

Poster 発表には、質・量・運営方法の面で、一番課題が残っていることが判明しました。発表時間を増やす・2 部制にするにしても、質を維持しつつ数ある程度確保する必要があります。また、数が確保されたら、ポスター会場を広くする必要があると思います。時間をかけて対策を考えたいと思います。

⑦ 二次会について

コメントの抜粋・まとめ

- 有志の2次会であっても、領収書が必要な人がいるので事前に準備しておいたほうが良い。
- 去年から使っている二次会の場所は、高い割に会場手前のラウンジとあまり変わりなく狭い。
- 2次会に関しては、昨年からの立食よりは、以前のようなざっくばらんな居酒屋のほうが、かえって色んな人と話げできたような気がします。

解釈と対策： 過去についたクレーム（所内開催時は「ケータリングの質」、居酒屋開催時は「移動がしにくく、いろいろな人と会話ができない」）を反映し、現状の二次会形式になった経緯があります。交流促進のために、立食形式は維持しつつ、もう少しスペースがある会場が確保できるのか、価格面も含めて、どんな選択肢があるのか検討したいと思います。

⑧ 最後に（まとめの挨拶）

過去4年間、いろいろな方々のサポートのおかげで、自分が描いた「新たなコンセプトの研究会」を開催・発展させてくることができました。今回のアンケート結果を見て、改善の余地はあるものの、大きな方向性は確立できたと感じました。この場を借りて御礼申し上げます。

代表提案者として、「最先端の面白い話を、幅広く手軽に聞けて、交流ができる会」を、「最小限の労力・負担で開催する（運営組織を大きくしない）」ことにこだわってきました。

前者は、研究会の開催目的である「領域としての研究力とアウトプットの向上」を達成するためです。

後者は、要望に柔軟に対応しつつ、研究会を開催し続けるための工夫です。

本研究会は、研究領域の活性化のために、代表提案者と受入教室のメンバーの若干名が、本務外の「ボランティア」として開催しています。

研修ポイントなどで参加義務を実質的に課して、学会費・参加費・協賛費などの収入を確保し、プロの運営会社が開催する学会ではありません。そのため、サービス面では至れり尽くせりとはなりません。引き続き、本務に支障が出ない範囲で、運営の努力を続けたいと思います。

参加者にとって研究面で有益な会を開催することにより、研究領域を活性化して発展させられると、私は考えています。そこで、自主的に参加されている皆様にも、本研究会をより面白くするために、以下の4つをお願いします。研究会が充実すると、参加される皆様のためにもなります。

- | | |
|------------------------------|-----------------|
| （1）最新の成果をたくさん発表する | （研究力を磨き、研究を進める） |
| （2）他の研究者の発表に対して建設的なコメントをする | （分析力・コメント力を磨く） |
| （3）面白い研究をされている方に口コミする | （仲間を増やす） |
| （4）将来を担う可能性がある若手人材を研究会に連れてくる | （学び触発される機会を与える） |

引き続き、ご支持とご協力のほど、よろしくお願いいたします。

代表提案者 佐々木 努（京都大学 大学院農学研究科・教授）